
籠ノ鳥

明良

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

籠ノ鳥

【Nコード】

N0884Y

【作者名】

明良

【あらすじ】

閉じられた世界しか知らない、王女シエラ。常に世界から隔離された部屋に閉じ込められながら自由を望む。しかし彼女の知る世界は崩れ、生き残ったのは彼女だけとなってしまった。彼女を取り巻く世界は少しずつ他の者によって変わって行く――。

消失

——もし、

もし自由があるなら。

この羽を広げることが許されるなら。

もう泣かなくていいなら。

もし・・・——。

「その娘は生け捕りにしろとの命だ。殺すなよ。」

ひどく、耳鳴りがする。

連続的な爆発音、幾多の足音、そして、悲鳴。

うず高く積み上げられた人の亡骸。

目につつるそれは、昔本で読んだ地獄のそれと酷似していた。

「全く、皇帝陛下は大層な物好きであられる。こんなちっぽけな国の王女を生きたまま捕らえるなんて・・・。」

「きっと、何かお考えの上で生け捕りにするんだろう。皇帝陛下のお考えが外れた事はないからな。」

「まあ、姫と言うだけで利用価値は他とは違っただろうな。」

私は王女。一人で脱け出すことすら出来ない、籠の中の鳥・・・。
私は・・・——。

カチャカチャと鎖がぶつかり合う。手錠を嵌められ、足には鎖で繋がれた重石が付けられた。

足首を動かす度に擦れ、赤く腫れ上がっていた。

でも痛みを感じない。痛みよりも遥かな孤独が胸を締め付ける。

苦しさで息が上がる。嫌な汗が頬を伝い流れる。

私を連れて歩く兵士は、ただ従順に任をこなしている。

（この人たちは何故、束縛されながら生きるの・・・？束縛されても、人は生きて行ける・・・？）

ついさっきまで小さいながらも活気があった国は、最早瓦礫の城と化していた。庭に咲いていた薔薇も、街を行き交う人の波も、城を囲む豊かな緑も、みんな。

みんな、消えてしまった――。

私を育て、そして閉じ込めた父様も母様も侍女達も・・・・・・・・みんな消えてしまった。

私一人が生きてしまった。

でも生き残った先に、私の自由はない。

裸足で瓦礫の城を歩く。もう足は沢山の瓦礫で傷ついていた。不意につまづき、そのまま体が投げ出される。

途端、首にかけられた鎖を引かれる。

「さつさと歩け。王女様は歩き方すら知らないのか？さあ立つんだ。

」

無理やり首を引かれ、呼吸が苦しくなる。惨めに投げ出された己の肢体をなんとか起こし、瞬間また鎖を引かれ歩き出す。

冷たい地面が足の裏から伝い体を冷やす。

寒さに震えながら歩き続けた。

何故私は束縛されなければならないのだろう。

答えは誰も教えてくれなかった。みな固く口を結び、時に叩かれ怒られた。

私の存在は、生を受けた時から消えてしまった。

要らないから、みんなは無駄を省くと同じように私を省いた――

私は必要のない、飾り物の王女。

ふと空を見上げた。閉じ込められていた部屋の天窓からよく眺めていた空。その空が、まるで人々の血や慟哭のみを吸い取ったように黒く赤く、歪なまでに沈んでいた。

そこに、今まで目にうつった光景はなかった。

世界に射し込み照らす太陽が見えない。夜を優しく包み煌めく星々も月も。

唯一、あの流れる景色だけが好きだった。私が生きてると感じられる時間だった。私の目を通してうつる景色が、それだけが私の中のただひとつ、人形じゃないと感じられる事だった。

風が砂塵を舞い上げながら通りすぎる。冷たさが肌を刺す。そのなかをただ崩れて跡形もなくなった城門に向かって歩いていった。

どれくらい歩いただろう。なんせ城の外など歩いたことがない。初めて外に出たとしても、結局自由はなかった。

足枷が重い。足に力を込めないと今にも崩折れてしまいそうだ。

（どれくらい歩いたかしら……。足が冷たい。感覚が、わからない……。）

身に纏っている白のシンプルなドレスは汗で大分重たくなっていた。見るからにみすばらしい格好だった。これが一国の王女だなんて、誰が信じるだろうか。

俯いたまま歩いていると、前の兵士が止まった。つれて私も止まった。

兵士が姿勢を正すのが視界の端にうつった。

「王女を捕らえてきました。抵抗する気配はありません。」

誰かと話してる声がする。もうどうにでもなれと思った。

N e x t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884y/>

籠ノ鳥

2011年10月31日11時17分発行